

Title	ウナムノと日本
Author(s)	吉田, 秀太郎
Citation	大阪外国語大学学報. 19 p.145-p.149
Issue Date	1968-06-25
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80320">https://hdl.handle.net/11094/80320</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# ウナムノと日本

## Unamuno y el Japón

吉 田 秀 太 郎

Hidetaro Yoshida

### Sumario

Quizás nadie como Miguel de Unamuno ha mostrado, entre los escritores españoles contemporáneos, tanto interés y tan penetrante observación en los problemas culturales extranjeros, sin hablar de los nacionales. El Japón no era excepción. Sobre nuestro país ha escrito don Miguel, entre 1907 y 1924, por lo menos cinco ensayos: *El problema religioso en el Japón* (1907) *Jujitsu en Bilbao* (1908), *Más sobre el japonismo* (1909), *Primera visión europea del Japón* (1914) y *El estilo de Haikai* (1924). Salvo este último ensayo, todos son consideraciones de los aspectos del vivir japonés desde el punto de vista propio de Unamuno pensador, más subjetivo y arbitrario que científico, no por eso dejando de ser profundo. Su visión del Japón no es siempre halagadora para nosotros. Tiene, sin embargo, mucho de verdad, y a veces, agudeza profética. La presente tesis tiene por finalidad aclarar algunos detalles relativos a lo que ha unido a Unamuno al país del Extremo Oriente.

ウナムノが日本にやってきたことは一度もない。それどころか、ヨーロッパでも、彼が足跡を記したのはフランスとポルトガルの二国にすぎない。しかも、フランスへは、追放による、止むを得ぬ旅として行ったのだった。彼が、カスティリア高原の西北部、サラマンカの地をこよなく愛し、そこから離れようとしなかったことは有名である。にも拘らず、彼ほど外国に対して深い関心を示した人も少ないのではなかろうか。十五巻に及ぶ彼の全集には、外国の思想家や作家・詩人に関するエッセイが数多く収められている。日本もまた、その例外ではなかった。彼は1907年から1924年にかけて、少なくとも五編、日本に関する論文を書いた。「日本における宗教の問題」(1907), 「ビルバオでの柔術」(1908), 「日本精神について更に一言」(1909), 「ヨーロッパ人の初めて見た日本」(1914), 「俳諧の文体」(1924)がそれである。この最後のものを除いて、殆んどすべて、思想的な内容のものである。では、なぜウナムノは日本の風物や、日本人の思想に興味をもつようになったのであろうか。しかも、彼のエッセイの大部分が、この時代に集

中しているのはなぜだろうか。先ず第一の疑問に対する解答として、1)彼の生来の知識欲の旺盛さ、2)彼が、いわゆる近代派詩人たちと親交のあったこと、(近代派詩人の作風の特徴の一つは異国趣味だった)3)「ビルバオでの柔術」にも見られるように、偶然、スペイン国内で日本人に接したという、個人的な体験、をあげることができよう。第二の疑問への答は簡単である。日露戦争における日本の勝利は、ヨーロッパの人々に複雑な感慨をもたらした。殆んど人間が、称讃と驚きの眼で日本を見た。米西戦争に敗れたスペインでは、折しも祖国の再建をめぐって、知識人の間で議論がたたかわされていた。ある者はスペインをヨーロッパ化すべきだといい、ある者は、ウナムノのように、ヨーロッパをスペイン化すべきだといい、マエストウのように、スペインの日本化を唱える者もいた。このような内外の情勢から、日本が、その当時、世界の関心の的となっても不思議ではなかった。大部分の西欧人が、日本に好意的な態度を示した中において、ウナムノは、必らずしもわれわれを喜ばせるような文を書かなかった。彼は日本に対する感傷的な称讃を嫌った。これは、彼が嘗て書いた「ヨーロッパ化について」の中で、ヨーロッパに対して見せた態度と同じである。その端的な例が、「日本における宗教の問題」である。ウナムノがこれを書くに至った直接の動機は、グワテマラの作家、エンリケ・ゴメス・カリーリョの著書「大和魂」を読んだことにあった。そこには、日本に対する惜しみない讃辞があった。ゴメス・カリーリョはパリで文芸活動を行う傍ら、世界の各地を旅行し、途中、日本にもやってきたことがある。日露戦争直後のことである。上記の著書の他にも「英雄的で紳士的な日本」(1894)や、「マルセイユから東京へ」(1902)などを著した人である。「日本における宗教問題」は、日本の知識人の言葉を借りて、思想的な、文化的な面からの日本を紹介したゴメス・カリーリョへの反論とも呼ぶべきもので、およそ、賞め言葉らしきものは何もない。彼の脳裏に浮ぶ日本には、アキレス的な人間はいてもホメロスのような人はいない。集団的な自惚れと傲慢さが偽りの謙虚さでおおわれており、最も没個性的であって、主観的であることが極めて少ないために、魅力に乏しい。「私は国民の中に大衆を求めるよりも、むしろ個人を求める」とウナムノは言う。

更に彼は、日本人と西欧人との思想的な立場の違いを、ベンジャミン・キッドの言葉を引用しつつ明らかにする。すなわち、西洋文明の根本原理が、個人の絶対的な価値の原理であり、個人的意識への執着のそれであり、要するに、人間の魂の不滅の原理であって、科学と理性が何と言おうと、西洋人の魂はそれが完全に消滅することに耐えられない。パスカル、セナンクール、キェルケゴール、そしてニーチェの最大の内的悲劇は、個人の永遠性を求める心(*corazón*)と、それを拒む頭(*cabeza*)との抗争に由来し、現代の悲劇的感情も悉く、ここからきている。これに対し、日本人は、そのような実存的な苦しみを感じない。日本の知識人が宗教について述べる時、情熱が全く感じられないと指摘する。この様なウナムノの考えは、「日本精神について更に一言」において一層強調されている。従って、彼にとって、日本の武士道とか、切腹が理解し難いのも当然である。「一人の人間が、平静に死を受け、あるいは自らに死を与え、微笑しつつ割腹することを精神的に優れていると感心している人を知っているが、私は常に、そのようなことに動物性を見るだろう」と彼は言う。

ウナムノが日本に見る今一つの著しい傾向は、その主知主義である。宗教心の欠如と併せて、憂うべき事態だと考えている。「私には、日本人が果して、理性が人類を幸福にし得ると考えているのかどうか、わからない。しかし、私にとって確かなことは、幸福とは、飽くまでも希望に基くものであって、しかも、その希望は、非合理的なものに基いているということである。…理性は、われわれを真理と関係づける唯一の手段ではない。また、真理とは、論理でもって示すことのできない、あるいはそれと対立関係にあるところの、非合理的なものであろう。…すべての人々が、いわゆる自由思想家で、余り充分に知りも得で、しかもその適用の域を大して出ない科学の崇拜者で、理性の万能を信じている、そんな国民ほど悲しいものはないと私は考える。」これは彼が書いた時代を考慮するとき、極めて穿った、鋭い批評であると言わねばならない。

宗教とは、宇宙に倫理的・美学的乃至は論理的な、卓越した意義を与えるための努力である。われわれ人間にとって、宗教は常に、われわれの好むと否とにかかわらず、全宇宙に人間的な意義と目的を与えようとする努力であって、「誰がために神は世界を創り給いしや」という問に対して「人間のためになり」と答えるこの簡潔で崇高なカトリシズムの問答の素朴さこそ、根本的に、われわれの希いの基礎をなすものである、と考えるウナムノにとって、日本に神道、仏教、儒教、キリスト教の四大宗教が混在し、互に反動をおこし合っている姿は確かに、異様に思えたに違いない。彼にとって、仏教は、その根底において、忍従された絶望感 (*desesperación resignada*) にすぎず、その効果は「国民を無関心の中に沈滞させることではないか」と考えられる。また、儒教は、恐ろしく思慮深い、論理的な教義であり、恐れを抱かしめるほど詩に乏しく、卑俗性の故に、驚くほどの倫理性をもっており、寒気を覚えさせると述べている。

さて、「日本精神について更に一言」だが、これは、ウナムノと同時代のスペイン人、ラミロ・デ・マエストゥの書いた「ばらと桜」に対する評論である。ウナムノもマエストゥも、共に1898年代の作家たちとして有名を馳せた人であるが、その考え方は甚だ違っていた。先般述べた通り、マエストゥは、スペインの日本化を提唱したほどの人で、ウナムノと話が合う筈がなかった。「ばらと桜」が「日本における宗教の問題」への反論なら、「日本精神について更に一言」は「ばらと桜」への反論である。マエストゥの盲目的と思われるほどの日本礼讃に、ウナムノは我慢がならない。ウナムノにとって、自己の本来のものを失うことは、悲しむべき事なのだ。日本の知識人の物の考え方は、西欧文明に毒された人間のそれであって、日本独自のものを失っていると決めつける。また、マエストゥが、スペイン人のエゴティズムは、日本人の没我的心情とくらべて憎々しいものをもっている、と言えば、ウナムノは「日本の『われわれ』の方が、スペインの『われ』よりももっと我慢がならない。集団的な *egotismo* は個人的な *egotismo* よりも高慢で、憎々しい。日本は国民という形で、集団的なエゴティスムぶりを可成りはっきりと見せた。」と反論する。スペインの代表的な知識人であるこの二人の論争は、共に真理の一面を捕えているがすべてではない点において、異質の文化をもつ国の理解の限界を示唆しているかのようである。

「ビルバオでの柔術」は1908年10月に書かれたもので、時間的には、「日本精神について更に

一言」よりも一年早い。スペインはバスク地方のビルバオ市を訪れた日本の一柔道家の行動を通じて見たウナムノの日本観とも言うべきものである。ここでもまた、ウナムノは、日本人に対して、かたくななまでに、否定的な態度を示している。「猿の様な顔をした日本人」、「残虐さを信奉している日本人」、「偽善的な日本」、「ごう慢な日本人」といった言葉が遠慮もなく出てくる。ウナムノは、一人の小さな日本人に、バスクの大男が奔弄されたことに、プライドの傷つく思いをしたのであろうか。いかにも、スペイン人、生粋のスペイン人らしいウナムノの赤裸々な一面が伺えるような気がする。「日本における宗教の問題」で既に見たウナムノの態度は、ここでも一貫している。「日本は日露戦争の勝利で、ごう慢になっている。やがて、ロシア人が、彼らを倒すことになるだろうなど、今なら恐らく、ピタゴラスの定理さえ信じないほどに信じないだろう。私は、より少ない力を、より知的に操って勝った柔術の中に、日本の縮図を見る。ここで言いたいのは、器用さを濫用してはならないということだ」と彼は警告する。半世紀の後に起ったことを考えるとき、われわれは彼の洞察力の鋭さを見ずにはいられない。「ヨーロッパ人の初めて見た日本」においては、ウナムノは、日本人の模倣の上手さと積極性を強調している。ただ、このエッセイは、多分にポルトガル人の旅行記の解説的なところがあるので、ここではこれ以上掘り下げないことにする。

さて、以上述べたのは、総じて、日本人の精神生活に関するウナムノの考えと、その問題点についてであったが、今度は、最後に、詩人としてのウナムノの一面を伺うに足る、これまでとは違った内容のエッセイを紹介したい。「俳諧の文体」がそれである。

これは「文体をめぐる」(*Alrededor del estilo*)と題する一連のエッセイの一部をなすものである。このエッセイは第1章から第31章までであり、その中、第16章までは、彼が追放されていたフエルテベントウラ島で書かれ、あとはパリで書かれたものである。(但し第16章と第28章は発表されなかった)第20章の「友人ガルドスの文体について」以外は元々題名がなかったのを、ウナムノ研究家で、数年前に亡くなったガルシア・ブランコ教授が、整理の都合上適当につけた。「俳諧の文体」は第25章になっている。1924年10月12日、マドリードの「エル・インパルシアル」紙に掲載された。ウナムノが追放されて、パリーに滞在中、友人のフランス人、ポール・ルイ・クーシューから、彼の著書「アジアの賢人と詩人」(*Sages et poètes d'Asie*)をもらったことが、このエッセイを書く動機となったと、ウナムノ自身、述懐している。クーシューは詩人で、日本にも数年住んだことがあった。A. ポンサンとジュリアン、ボカンスと共に創作俳句を「水流」(*An fil d'eau*)と題して著すなど、日本の文学に造詣の深い人だった。ウナムノの文筆活動の初期は、スペイン文学史上、モデルニスモの時代でもあった。そして、多くの近代派詩人が日本の風物や文学、特に俳諧に、異国的な情緒を求めたものである。彼らの中には、ホセ・ホアン・タブラダや、先述のエンリケ・ゴメス・カリーリョなど、直接、日本を訪れた人もいた。従って同時代のウナムノが、たとえ、近代派詩人に好感を持たなかったとは言え、この様な詩人を通じて日本の伝統的な詩に接したであろうことは考えられないことはない。しかし、書かれた資料としては、やはり、クーシューのこの作品が、ウナムノと日本文学との接触を可能にした最

初のものである。

ウナムノはクーシェーの芭蕉論を紹介する傍ら、彼自身の俳諧論を見せてくれる。先ず、俳諧とは5, 7, 5の三つの部分 (miembros) からなる (compuesto de) —というより、三つの部分に配置されている (dispuesto en) といえるのではないか——17音節の小さな純粋な詩である」とし、いくらスペイン人が俳句をつくっても、所詮は羽根ならぬ鋼鉄のペンで書いているのであって、日本人がそれを毛筆でしか、ひじで書くところに違いがある。と述べ、そのデリケートなニュアンスの差を指摘する。また、芭蕉の人となりについて、彼が一種の娯楽、遊戯—amusement—を純粋な芸術品—というか、聖なる作品 (obra de santidad) にまで高めたことに言及し、彼は、日本のパスカルであるといった。幾何学的な精神はないが、彼と同様に深刻 (grave) で、心 (corazón) に通じる道を発見しようとして同様の苦しみを味わったところが共通しているというのである。ウナムノは、芭蕉が「お前たちの俳諧が、小雨に濡れ、微風に揺れる柳の枝に似るように心掛けよ」と言ったということに、痛く感心している。困みに、この言葉は、スペインの現代文芸評論家カルロス・ガルシア・プラダも引用しているところから、その出典は同一のものであると思われる。ところで「私なら『小雨に愛撫され云々』というだろう」と言っているところは、いかにも一言なからずべからずのウナムノらしい。ウナムノはまた、芭蕉が弟子の基角の作った「赤とんぼ／つばさをとれば／唐がらし」をなおして、「唐がらし／羽根をつければ／赤とんぼ」としたというエピソードを評して彼が進歩主義者 (progresista) であることの根拠としている。筆者はこの原詩について調べてみたが、遂に確認できなかった。

二、三の詩人を紹介したあと、ウナムノはスペイン語またはフランス語での「ハイカイ」に興味を持たれるのは、連想 (asociación) と同時に分解 (disociación) の妙味があるからで、俳諧は componer するのではなく disponer することであり、asociar または comparar するものではなく separar することだと述べているのは、確かに興味ある見解である。芭蕉が行なった基角の俳句の倒置に関連して、「彼と同時代のパスカルは『習慣は第二の天性なり』という言葉を用いて、『天性は第一の習慣なり』と言った。この様に、antítesis, transposición, disociación の方法——道——が、文体論的方法のすべてであろう、あるいは方法論的文体のすべてであろう」とウナムノは結んでいる。